



特選作品

大切な妹

横浜小学校5年

末田 直也

ぼくには、生まれつき障がいのある妹がいます。うまくしゃべれなかったり、立って歩くことができなかったりします。ぼくや姉は、大きな声でしゃべったり、走り回って遊んだりしますが、妹にとって、それは、当たり前のことではありません。でもぼくにとっては、宇宙一かわいくていやしをくれる大事な家族です。

幼少期の頃は、「何で妹はうまく立って歩いたり、うまくしゃべったりできないんだろう。」と、とてもふしぎに思っていました。お父さんやお母さんから、「妹は、ゆっくりだけど、毎日、こつこつと成長するためにがんばっているし、楽しいとか、うれしいとか、

たり泣いたりします。ゲームも、クリアできないとすぐに、「やって。」と、ぼくに渡してきます。興奮すると、大きな声を出します。でも、そんな兄は、ぼくの言うことは聞いてくれない。両親の言うことを聞かなくても、なぜか、ぼくの言うことは聞いてくれます。ぼくが兄のお菓子を食べても、兄は怒りません。そして、ぼくが宿題をしていると、兄はぼくのとおりに来ます。自分が言うのも何ですが、兄は、ぼくのとおりが好きだと思います。ぼくもそんな兄のことがきらいではないです。それに、兄がいてくれたことで、ぼくは色々なことを知ることができています。その一つがヘルプマークです。兄は、外出時のカバンに、ヘルプマークのストラップを付けています。ヘルプマークとは、外見からは分からない障がいや病気などで配慮や援助が必要なことを、周りの人に知らせるた

かなしいとか、いろいろなことを思っているんだよ。」と教えてもらいました。それから、ぼくは、妹と

いっしょに遊んでかわいがったり、見守ったりしました。妹のことが大好きで仕方がありませんでした。すると、ほんの少しずつ手をにぎってくれたり、ぼくが笑わせたら笑ってくれたりするようにになりました。言葉はしゃべれなくても、心は通じ合っているんだなと思いました。

ある日、家の中で妹が急に長いけいれんを起こしました。ぼくは、頭の中がこらんとしました。心の中で、「自分にできることは？妹はどうなるの？何でこうなったの？」

状況が理解できなくて、言葉がつまって出てきませんでした。お母さんがスマートフォンを持ち、だれかと話しているのが見えました。話が終わったのでだれと話していたのか聞こうとした時、お母さんが妹に向かって、

「あともうちょっとで救急車が来るからね。」

と聞いていました。ぼくの胸がドクンと大きな音を鳴らしました。いっしょに、今までにないほどの緊張を感じました。マンションの下から救急車の音が聞こえ、救急救命士がマンションのインターホンを鳴らしました。ぼくも、救急車に乗り、大きな病院に行きました。待合室で検査の結果を待っていると、病院の先生に、

「大丈夫でした。」

と聞かれて、一安心しました。妹が無事でよかったです。ぼくは思います。「みんなが頑張ってほしい」と世界中の人が思えたら、もっと優しい世界になるんじゃないかと。妹は毎日一生けん命に生きています。みんなとはちがうところもあるけれど、妹には、成長してできることをふやしたいという気持ちがあります。そのために毎日必死にがんばっています。そんな妹を見ると、

めのマークです。また、ぼくは、兄に付き

添って、障がいのある子どもや大人が参加するサッカー教室に行ったことがあります。見学のつもりで行ったのですが、スタッフの方に、

「一緒にやってみない？」と、誘われ参加することになりました。参加してみると、参加者の年齢も様々で、中には、目が不自由な人もいました。どうやってサッカーをするのだろうと、緊張しているぼくとなりで、兄は、

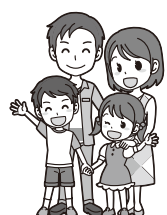
「裕陽もやるの？サッカー、楽しみだね。」

と、うれしそうでした。このサッカー教室に参加している人は、みんな一生懸命で楽しそうでした。難しい人にはフォローし、できた人みんなで拍手をしました。驚いたことは、ボールから音が聞こえてきたことです。このことをスタッフの方に尋ねてみると、

「目の見えない方たちにも、サッカーを楽しんでもらえるように工夫しているんだ。」と、教えてもらいました。少しの工夫で、いろいろな年齢や障がいのある人みんなが楽しくできることを知りました。このように、兄と一緒にいると、たくさんのことを学べて楽しいのですが、実は、そんな兄の顔を見たくないくらい、大きらいになっていった時期がありました。それは、兄がまだ小学生で、一緒に学校に通っていた時のことです。休み時間に、ぼくが友だちと遊んでいると、兄は必ずといっていいほど遊んでいるぼくを探しては、

「一緒に遊ぼう。」と、声をかけてくるのです。仕方なく仲間に入れても、兄はただ見ているだけだったり、負けて怒ったり泣いたりしていました。ぼくはそんな兄がとてもしやばい。そんなことが何日もあり、ぼくは、兄のことがとてもきらいになって、学校に行きたくない時期がありました。ぼくは、このことを誰にも言わずに過ごしていました。が、とうとう我慢できずに、両親に自分の気持ちを打ち明けた。すると、両親は、すぐに学校へ相談してくれました。そして、登校時間をずらすことになり、兄は母と登校し、ぼくは妹と登校するようになった。学校でも、先生方が色々工夫してくださり、休けい時間に見えなくなりました。兄は兄で、ぼくが知らないところ

「ぼくも負けてられないな。」と思います。妹はぼくにとって大事な存在です。そして、妹と過ごしていると、必死にがんばる大切さを教えてくれているような気がします。ぼくもいろいろなことに挑戦し、一生けん命に努力を重ねていきたいと思っています。そして、だれにでもそれぞれ個性があり、よいところがあるので、おたがいに尊重し合って、みんなが楽しく暮らせる世の中にしていきたいです。これからの妹のことで、うまくいかないことやつらいことがあると思います。でも、ぼくはずっと妹の力になって、いつまでも、いっしょに泣いたり笑ったりしたいです。妹がいてくれて、毎日、本当に幸せです。ぼくは妹のことが心の底から大好きです。そして、これから妹といっしょにゆっくりと一歩ずつ歩んでいきたいです。



ぼくは、きょうだい児

小屋浦小学校6年

奥川 裕陽

みなさんは、「きょうだい児」という言葉を知っていますか。「きょうだい児」とは、重い障がいや、重い病気がある兄弟、姉妹がいる子どものことです。

ぼくには、二つ上に兄、二つ下に妹がいます。そして、二つ上の兄に障がいがあるので、ぼくは「きょうだい児」になります。

なぜ、この言葉を知っているかというと、テレビできょうだい児の特集がされていたのを見たからです。偶然見た番組でしたが、ぼくは、最後まで見入っていました。そして、その番組から、ぼくは、きょうだい児という言葉と、自分自身がきょうだい児と呼ばれる立場なのだということを知りました。

兄は、特別支援学校に通っています。気分を落ち着かせる薬を飲んでいますが、一番になれないと怒っ

あんなに大きらいだった兄とは、今ではうそのように仲良しです。そして、今も変わらず、ぼくのことを大切に思ってくれている人たちが側にいてくれるおかげで、ぼくは兄の周りのことに興味をもつことができます。こんな風になつたのも、ぼくがきょうだい児という立場だからだと思っています。これから、兄は、ぼくの兄で変わりますが、けんかもするし、顔を見たくない時だってあると思います。だけど、あの時みたいな、大きらいになることは、もう、ありません。これから、ぼくは大人になり、助けてもらう側から助ける側になります。困った人がいたら、すぐに手をさしのべることができ、助けてあげることができ、そんな大人に、ぼくはなり

